少年音樂家（三）

東京女高師教授　岡田美津

二、山路

不思議な力が父には出たらしく、確りした手付で寫眞やマドンナの額を取外して、殘して行く筈の箱へ綺麗に詰めた。彼はまた寢棚の下から大きな塵だらけな手提鞄を引出して中に食物だの、着換だの、四方に散亂つてゐる樂譜紙だのを入れた。

民雄は戸口に佇むで茫然と見詰めてゐたが次第に常にない妙な眼付きをして、

「父さん、僕達は何處へ行くンです。」

と室内へ徐に歩み入つて聲を慄はして尋ねた。

「歸るンだ。歸るンだよ。」

「卵だのベーコンだのを買ひにゆく村へ？。」

「いゝや。あそこにでない。ちがふ方角へ。こんどは谷の方へ行くのだ。」

「谷？　銀の湖のある谷の方？。」

「あゝ。そのもつと先だ……ずつと先だ。」

と父は夢心地で答へた。彼は手にしてゐる寫眞を眺めて居るのであつた。バラ〳〵の樂譜紙の中へ辷り込んでゐる爲、仕舞ひ殘された美人の寫眞であつた。

暫時民雄は父の心を測りかねて視てゐたが、やがて

「父さん。それ誰です。他の寫眞に寫つてゐるいろンな人は誰なんですか。父さんは一つも話して下さらない。唯衣囊の中に始終入れていらつしやる少さい圓い寫眞だけは敎へて下すつたけれど、あのいろンな人達は誰です。」

父は返事をしないで他事を考へてゐるやうな眼を向けて想ありげに微笑した。

「民雄、さぞあの人達は御前を可愛がるだろうな。さぞ可愛がるだろうな。あまり可愛がられて我儘者になつてはいけないぞ。父さんの教へた事をみンな覺えていなければいけない。」

民雄は重ねて尋ねた。けれども父は唯寫眞に向つて何か解らぬ事を小聲にいつて居るのみであつた。

それからは民雄はもう尋ねる事をしなかつた。彼はあまりに驚き、あまりに味氣なく思つた——父がこんな態度をした事がないので。父はせはしなく物品を手提に押込んだり、古トランクへ詰めたりして室を取片附けた。その上ひつきりなしに獨語してゐた——それが民雄には殆ど一句も意味が解らなかつたけれど、後刻に父はバイオリンを取上げて彈いた。それが今迄に嘗てない彈き方であつた。民雄の眼は涙で一杯になり、胸は痺れ塞がるかと思ふ程の苦しさを感じた、何故だか譯は解らなかつたが、時過ぎて父はバイオリンを放して疲勞しきつて椅子に仆れた。民雄も、それやこれやに怖れ疲れて、寢柵に入つて眠に就いた。

夜がしら〳〵明ける頃、民雄は見馴れぬ世界に目を覺ました。父が優しい白い顏をして自分を呼び起こして、朝食の支度をせよと言つて居るのであつた。室は裝飾を剝がれて裸に寒げだつた。手提鞄は蓋がされ、革紐で括られて函入りのバイオリン二つと一所に持出すばかりになつて牀の上に、戸口近く置いてあつた。

「急がなくてはならないよ。汽車へ乘るまでに隨分歩くのだから。」

「汽車！ほんとの汽車？　汽車に乘るンですか。」と民雄はすつかり眼が覺めてしまつた。

「あゝ。」

「手に持つてゆくのは其處にあるのだけ？。」

「そうだ。さッさと御爲。」

「でも此處へ歸つて來るンですね——何時か。」

之には返事が無かつた。

「父さん——いつか——歸つて來るンですね。」

と民雄の聲は切であつた。

父は屈んで鞄の既に緊く締めてある革紐をなほも締めてゐた。それから氣輕に笑つて、

「そうとも。御前は何時か歸つて來るよ。こんなに種々の物を此家に殘して行くではないか！。」

皿小鉢ものこらず仕舞ひ、衣類もすつかり始末を

し、住み馴れた室へ最後の名殘を惜しンで父子は鞄とバイオリンを手に持つて爽な朝の戸外へ歩き出した。父は戸に錠を下しながら深く歎息をしたが、民雄は氣が付かなかつた。民雄の顔は東を向いて居た——彼はいつでも太陽の方を視て居る子なので。

「父さん。やつぱり行くのは止さう。此家に居ませう。」

と朝の美しさに飽くまで浸りながら彼は思ひ入つて賴んだ。

「行かなくてはならないンだ。さ、おいで。」

と、父は青々としてゐる坂を西へと先へ立つていつた。

行く先は見分け難い程の細道であつたが父はそれを看付けて行き馴れた路のやうに歩いた。唯時々確でもない足を蹈みしめたり、鞄の重みを休めるのに歩を止めた、やがて四面林になつた。鳥が頭の上で鳴きかはし、小さな獸が叢の中を驅り騷いでゐた。樹の間がくれの小河は、生きてゐるのが嬉しいと賑かに音を立てゝゐるし、見上げると、太陽は搖らぐ木の葉の中で隱れン坊をしてゐる。民雄はこんな事が皆悅ばしくて、跳ねたり笑つたりした。彼にはこんな事が變だといふ感じがなく、鳥も樹も日光も小川も林の中の小動物もみな自分の友達なのであつた。併し父は——跳ねも笑ひもしなかつた——自然を好む心は民雄とかはりはないのであるが。父は今案じきつて居るのであつた。

彼は力の及ばぬ事を企てたのだと今悟つたのである。一歩一歩に鞄は重くなる、腹部のひつきりなしの痛みが刻々烈しくなつて今では堪へがたいまでになつて來た。彼は谷へ降りる路がかうまで遠いのを忘れてゐたのである。山路へ掛からぬうちにはや彼は力が盡きかけてゐたのは氣附かなかつたのである。頭腦の中へ繰りかへし湧き出るのは「萬一自分が……」といふ考であるがその先を自分にも言語に纏めてみなかつた。

晝になつて晝食をする爲に休息し、夜はいさら小川が黑い池に流れ込むあたりで野宿をした。翌朝父子はまた山路を傳はつて降りたが、鞄を持つて居なかつた。父はそれを凹地の木の葉の下へ隱して、そして、事も無げにかう言つた。

「やつぱり之は提げて行くまい。辨當を出してしまへば他に入用のものも入つてゐないンだし、夜は

もう谷へ降りつくからな。」
民雄は笑つて
「ほんとに。いりませんね。」
と云つてまた笑つた。彼はたゞ譯もなく嬉しかつた民雄には鞄なンか入用がないのであつた。
二人は今山を半分以上降りた。そして草の生えた道路に出た。人の通らぬ所らしいが路には相違なかつた。なほ進んで行つて路が四筋になるところへ出ると、その二筋には車の轍の跡が澤山ついて居た。日沒の頃二人は小河に沿ふて行くと、小河は細聲に、野や草地の趣を語つてきかせた。民雄は谷へ著いたなと思つた。
彼はもう笑つて居なかつた。驚いた眼をして父を視てゐるのであつた。この子は心配といふ事をまだ經驗した事がなかつたが今初めて味はつてゐるのであつた。もつとも物事がうまく行つて居ないのだと漠然と感ずる位の程度ではあるが、父は先刻からあまり物を言はぬし、言ふ時には、はつきりせぬ常と變つた音調で言ふし、足早に歩いては居るものゝ一歩〳〵に骨が折れ呼吸がせはしく喘ぐやうである。眼が光つて路の前途を見詰めて、心ばかり急いてゐる風であつた。民雄は二度程話しかけたが父は答へなかつた。仕方がないので彼は疲れた足でコツ〳〵歩き續けて、心の中で昨日出た山頂の小家懷しいと思つて居る。
路をゆく人にはあまり逢はなかつた。逢つてもバイオリンを提げた父子連に注意するものは無かつた。丁度四邊に人氣の無かつた時に、父は路傍の草の上を歩いてゐて、躓いて仆れてしまつた。
民雄は飛んで傍へ來て。
「父さん、何です、何です。」
答へがなかつた。
「父さん、何故僕に何とも言はないの。民雄ですよ、父さん。」
父はやつとの思ひで半分身を起こした。暫時は茫然と民雄の顏を眺めて居たが思ひ出した事に刺戟されたらしく狼狽て動作を始めた。慄へる指で懷中時計と小さい象牙製の小像を民雄に渡し、それから衣袋を探つて草の上にピカ〳〵する金貨を——民雄の眼には百個もあると思はれる程——置いた。
「之を取つて——隱して——仕舞つて御置き。入用が——ある時まで——さ御いで。御いで。父さん

は行かれないから。」
と呼吸も切れ〳〵に彼は言つた。
「僕一人で、父さんとでなく？。」
と民雄は呆れて不服を言つた。
「僕は行かれない。路を知らないから、それに僕は父さんと一所に居た方がいゝ。」
と言つて時計と肖像を衣袋に納め、
「そうすると二人で一所に行けるから。」
といつて父の傍に坐つてしまつた。
父は力弱く頭を振つて、金貨を指した。
「それを――民雄――隠して。」
と父は蒼白な脣でガタ〳〵物をいつた。
民雄は焦心さうに金貨を拾つては衣袋の中に押込み、
「でも父さん、僕は父さんとでなくては行きませんよ。」
と頑に言ひ張つた。金貨が一枚殘らず片付いた頃に荷馬車が一臺ガラ〳〵上の坂の方から廻つて路へ出て來た。
荷馬車の主は路傍に居る男と少年とを意地惡げに眺めていつたが馬を停めなかつた。彼が過ぎ去つたあとで民雄はまた父に面した。父は再び衣嚢を探ッてこんどは上衣から鉛筆と帳面とを取出し、帳面を一枚引裂いて大儀そうに何か書き出した。
民雄は吐息をついて四邊を見廻した。草臥れてお腹が空いて居るが一體何がどうしたのか彼には解らなかつた。父さんが大變どうかしたに違ひない。もう大方暗くなつてゐるのに行く處もない、食べるものもない、山の上のあの遠い〳〵處には懐しい小家が人が居ないで淋しがつてゐるのに。あそこなら未だきつと日があたッてゐる――どうしたッて夕照と銀の湖とは見られるのに、こゝは灰色の陰影と、長く續く陰氣な路と、一二軒の家があるばかり他に何もありはしない。高いところから瞰下ろすと谷は麗はしい仙郷とも見えるが、ほんとに來て觀ると侘しい暗い荒れたところだと彼は思つた。
民雄の父は帳面からまた一枚紙を裂き取つて別の手紙を書き初めた。その時民雄は跳び立つた。二人の休むでゐた路の傍に、チラホラ見える家が思ひ付いたので、彼は足早に一軒の家の入口にいつて戸を敲いた。すると無愛想な女が出て來て、
「何です。」

と言つた。
民雄は山の女に物を言ひかけられた時父に敎へられた事があるので、帽子を脫して、
「今晩は！　僕は民雄といひます。」
と無邪氣にいつて、
「父さんが大變草臥れてあつちの方で仆れてゐるンです。どうか御迷惑でなければ今夜泊らせて下さい。」
戸口の女は目を見張つた。呆れて口もきけない樣子。質素な、いや粗末といつてもいゝ少年の服裝から、路傍に半身を橫へて居る男の樣子を見やつて、女は怒つたやうに頤を突き出して、
「フン、泊りたいッて！　呆れらァ！。」
と嘲つて、
「私ンとこはね無宿者の宿はしないよ。」
と言つてバタンと戸を閉てゝしまつた。
こんどは民雄が眼を見張つた。無宿者といふのはどんなものだか知らないが自分の賴む事がかう無下に拒絕られた事はなかつた。それだけは確だつた。何だかゞ心の中に込み上げて來て首から額まで紅くなつた。彼は戸のポッチにきつと手を掛けた——あの女に一言いつてやらねばと思つて。すると急に戸が開いて、さきの女が前程の恐ろしい權幕でなく、
「オイ、御前さん御腹が空いてるなら、牛乳とパンをやるよ。勝手口へ御まはり。出してやるから。」
といつてまた戸を閉めてしまつた。
民雄はあげた手を下ろしたが、まだ汐した紅味は顏にも首にも殘つてゐた。そして此女に物を貰ふなと心の中で何だかゞ止めてゐた。——併し——父さんが、あんなに疲れてゐる、自分の御腹も、ものが欲しくて〳〵堪らなくなつてゐる。貰はぬ譯にはいかない。民雄は首を俛れてそろり〳〵家について裏へ廻つた。
パン半塊、牛乳一杯を貰つた時、民雄は山中の村で買物をした時には父が御金を拂つたのを不圖思ひ出した。今衣囊に金貨があつて丁度よい、拂ふ事が出來るからと彼は考へた。途端に垂れた頭が高くなつた。取戻した自尊心で身體もシャンとなつた。彼は食物を片手に持ち直し、明いた手を衣囊に入れて光る金貨を一つ、擴げた掌にのせて出した。
「パンと牛乳の代に之を取つて下さい。」
と誇らしげに彼はいつた。

女は頭を振りかけたが貨幣を一寸視ると、驚いて、俯いてなほよく視た。それからッイと身を起こして怒りの聲を張り上げて、

「金貨だ。十圓の金貨だ！　ぢや御前は無宿者の上に泥棒だな。そんならこんなものはいるまい。」

と鋭く言ひ終り、民雄の手からパンと牛乳を奪ひ取つた。

民雄はひとり戸口に佇んだ戸内で急に門をかける音を耳にしながら。

泥棒！　民雄は泥棒の事はよく知らないがどんなものだ位は解つて居た。一ヶ月前に山の小家からバイオリンを盗み出さうとした男があつた時、あれが泥棒だと牛乳配りの小僧が言つた。民雄は閉まつてゐる戸口に對つて口惜しさにまた顔を紅くした。併し長くもゐないで、父の許に走り戻つた。

「父さん、いらつしやい。早く！　いらつしやい。」

と聲が咽喉に詰つたやうに云つた。

少年の聲があまりに切なので、思はず病人も起ち上つた。そして慄へる手で今まで書いてゐた手紙を衣嚢に押込んだ。紙を裂き取つた帳面は草の中に何時か落ちてしまつてゐた。

「あゝ、行かうよ。氣分が少しよくなつた。歩……ける。」

と父は呟いた。

父は歩いた。そろ〳〵と十歩か二十歩ばかり。すると、背後から車の音がして、それが二人の傍に停つた。

「オイ、御前さん達、村まで行きなさるのか。」

と誰か聲を掛けた。

「そうです。」

と民雄は素早く答へた。その村はどこにあるのか知らなかつたが、自分を泥棒といつた女の家から遠いところに違ひないと思つた。それだけが解つて居れば他に懸念はないのであつた。

「わしもその近くまで行くンだが、乗つて行きなさらぬか。」

とやはり親切に男が言つてくれた。

「え、ありがたうございます。」

と少年は飛び立つやうに答へた。そして共々父を助けて廣やかな荷車の上に乗せた。

あまり談話はなかッた。男は忙しく馬車を驅るので馬の方に氣を取られてゐた。病人はうつら〳〵と

して休んでゐた。子供は惱ましげな眼をして、樹や家が飛ぶやうに過ぎるのを默つて眺めてゐた。太陽は、とくに入つてゐるが暗くはなかつた、月が圓く光つて空は澄み渡つてゐるから、路が二叉になつて居るところで、男は馬を止めて、

「濟まないがこゝで下りて貰はなければならない。わしは右へゆくンだから。御前さん達ももう一二町行くだけだ。」

と快活にいつて、燈火がかたまつてチラ〳〵見えるあたりを鞭で指した。

「ありがたう、ありがたう。」

と民雄は父の歩くのを支へながら禮を述べた。

「御蔭で助かりました。どうも、ありがたう。」

民雄の心では、困つた際に助けてくれた御禮に、光つた金貨をみんなこの親切な男の足下に置きたいと無暗に思つた。併し、うつかりした事は出來ぬ、店へいつた時は御金を出してもよいが、店でないところでは泥棒にされてしまふらしいと彼は考へた。

民雄は父を相手に、目前の問題に對した。今晩どこへ泊らう。見たところ、父は遠くまで歩けさうもない、父は何か話をし出したが、低調に言ひさしてはあとを途切らせるので、自分には分らない、それがまた民雄には心配なのであつた。家は手近なところに一軒、村へゆく路に沿ふて三四軒あつたが、先刻の經驗で懲り〳〵してもう今夜は見知らぬ家や見知らぬ女に依頼る氣にはなれなかつた。

家よりも近くに、納屋のしかも大きいのが一つあつた。この納屋へと民雄は父を導いていつた。

「父さん、もし入れたら、あすこへゆかう。一晩あすこで休んでゆかう。」

と小聲に優しく勸めた。

○寄稿を歡迎いたします。

一、幼稚園教育界に關する諸集會の報道
一、保育上の諸調査
一、保育の實際について經驗談
一、其他御研究のいろ〳〵を